

53.3日周期の波が「冬季極大型」、40.0日周期、16.0日周期、12.3日周期の波が「春秋季極大型」を示した。北緯50～80度の500hPa高度値は、ほとんどの周期の波で「春秋季極大型」を示していたが、高緯度では低周期の波で冬季極大型を示した。QSWWを分解した各周期の波の経年変化は、53.3日周期の波が弱化、40日周期の波が強化していた。この結果は最近の真冬の振幅低下を裏付け

る結果である。

最後に③の解析の結果より、QSWWを分解した波は周期の長い波が有意な相関を得ており西高東低型、温帯低気圧型、移動性高気圧型と有意な正相関があるのに対して、北緯50～80度の500hPa高度値を分解した波はどの周期の波でも有意な相関を得ており、温帯低気圧型、移動性高気圧型と有意な正相関があった（第1表）。

湖／湖岸に着目したフィンランド人の居住における 自然環境の3つの意味

Three aspects of natural environment in Finnish habitation

北 川 一 美 Kazumi KITAGAWA

(本誌pp.91～100にフル・ペーパーとして掲載した。)